

第5回イオン未来の地球フォーラム 「いま次世代と語りたい未来のことーポストコロナの持続可能な未来ー」 開催報告

■開催概要

1. 主催

公益財団法人イオン環境財団、東京大学未来ビジョン研究センター、フューチャー・アース

2. 後援

外務省、環境省、日本学術会議、国立環境研究所、総合地球環境学研究所
地球環境戦略研究機関（IGES）、フューチャー・アース日本委員会

3. 日時

2021年2月6日（土） 13:00～17:00

4. 場所

オンライン開催（ZOOM Webinar 使用）

5. 開催趣旨

「イオン未来の地球フォーラム」シリーズでは、地球の環境変化に伴って起きている自然と人間社会における問題について、最新の科学的知見をわかりやすく解説するとともに、それらの問題や現象が起こっている背景、解決すべき課題と方法について、参加者とともに考える。第5回となる今回は、「ポストコロナの持続可能な未来」をテーマとした。

新型コロナウイルス感染症が世界規模で拡大し、人々の健康や社会経済に計り知れない負の影響がもたらされている。そもそも人獣共通感染症がたびたび発生する背景には、人間が森林などの自然を破壊し、人間活動が野生生物の領域に近づきすぎたという問題がある。また、急速に進むグローバル化による人とモノの大移動がもたらす負の側面も明らかになってきた。また、コロナ禍でエネルギー使用量が急激に減少し、二酸化炭素排出量が大幅に削減されたことから、これを気候行動のための社会変革につなげようとする動きも始まっている。

一方で、長期にわたる在宅でのテレワークやテレスタディを余儀なくされた結果、ITを活用した新しい生活様式も生まれてきた。大学の講義や国際会議などもオンラインで行われるようになった。こうしたライフスタイルの大変化を通じて、人々は物理的な距離を超えてつながり、より多様で国境を越えた交流も可能となった。ウイズコロナ、ポストコロナの社会では、リアルな世界とバーチャルな世界を有機的に結びつけた新たな社会のあり方が模索されている。本フォーラムでは、ポストコロナ社会を見据えて、それを持続可能な未来に結び付けていくための道筋を、講演者、パネリスト、参加者とともに考えていきたい。

■開催報告

1. 参加者数 約1,300名

2. 講演概要

山極寿一氏（京都大学、前総長）により「自然と人間の関係を問い直す」と題し、コロナの教訓として感じる事ができた、そもそもあるべきであった自然との付き合い方、人間同士のコミュニケーション、現代の不安や、地域の文化と風土にあったこれからの生活のデザインについて、チンパンジーやゴリラにもみられる習性なども参照しながら、説明があった。人間の社会は、移動する、集まる、対話する、といったことに関する自由によって作られてきたことが指摘され、コロナを通じて感じられたことにより、自己肯定感、自己実現感、社会とのつながりが失われやすいことについて、懸念が示され、人間以外の命を含めてシェアとコモンズを再考することが提案された。

高村ゆかり氏（東京大学未来ビジョンセンター、教授）により「よりよい未来に向かう復興」と題し、新型コロナウイルス感染症を通じて見えてくる今後のあるべき復興の形が議論された。人の集中とグローバルな人の移動が感染拡大の要因ともされており、いまの人間の経済のあり方、生活スタイルの変容が議論される中、経済の動きは鈍化したともいえるが、一方、再生可能エネルギーへの投資は堅調に伸びており、国際環境政策にとっても重要な検討が進められてきていることが紹介された。感染症から見えてきた、社会の脆弱性やレジリエンスの課題を乗り越え、カーボンニュートラルに向かう世界の中で、よりよい未来に向かう復興として、「どのような地域と未来を次の世代に残したいのか」を考え、長期的な視野をもって、次の世代とともに、ありたい、めざしたい地域と未来の姿を描くことから始めることが重要であることが提案された。

喜連川優氏（国立情報研究所所長、東京大学教授、総長特別参与（デジタルデータ活用））により、「実世界からサイバー世界へと人間活動の場をシフトさせた COVID-19」と題し、コロナ禍を通じておきたサイバー世界とのつながりの強化について、紹介があった。コロナ禍では、通信系企業の株価の急上昇や、トラフィックの増加、サイバー空間を介したイベントへの参加の機会の増加など、多くの「今までどうしてやらなかったのか」という気づきについて紹介された。特に、オンラインでの講義や学会等への挑戦が著しく展開され、著作権法の改正も進めることができたことなどが、データとともに示され、教育分野における今後の対面と遠隔ハイブリッドの有効性が示された。

3. 対話型パネルディスカッション概要

「ポストコロナの持続可能な未来を語ろう」と題し梶川裕矢氏の司会により討論が行われた。討論では、基調講演者の山極氏、高村氏、喜連川氏に加え、渋谷教育学園幕張高等学校、三重県立四日市高等学校、山陽学園高等学校の学生たちにより高校生内で行われたアンケート調査に基づく、コロナ禍での視点や生活の変化などの発表があり、その後、太田裕子氏（神奈川県政策局 SDGs 推進担当部長）、大塚隆志氏（公益財団法人 地球環境戦略研究機関（IGES）戦略マネジメントオフィス コミュニケーション・共創担当ディレクター）、春日文子氏（フューチャー・アース国際事務局 日本ハブディレクター）によるそれぞれの研究や活動の紹介、COVID-19 による影響、地震環境の変化、現高校生たちの見据える社会環境の将来像などを話し合わせ、活発な意見会が行われた。

【参考資料】

＜主催者挨拶＞



東京大学総長 五神真



イオン環境財団専務理事 山本百合子

＜基調講演＞



山極寿一氏

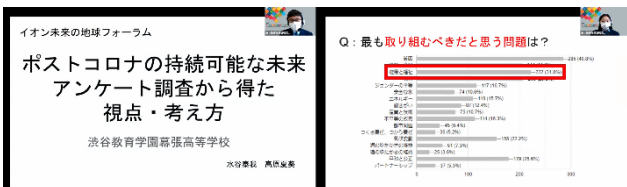


高村ゆかり氏



喜連川優氏

＜パネルディスカッション＞



渋谷幕張教育高等学校の発表



三重県四日市高等学校の発表



山陽学園高等学校の発表



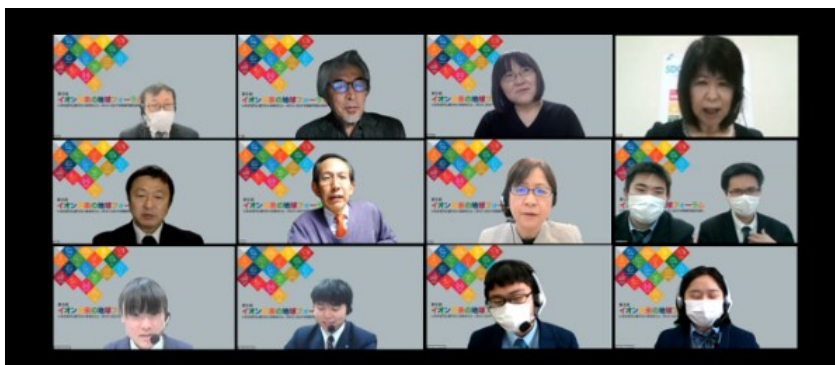
太田裕子氏



大塚隆志氏



春日文子氏



パネルディスカッション